

## 三島由紀夫「美徳のよろめき」論

—〈よろめき〉ブームから読む—

【キーワード】三島由紀夫、「美徳のよろめき」、姦通、中絶、ブーム

### はじめに

三島由紀夫の「美徳のよろめき」（『群像』昭和三二・四〜六）は、ベストセラーとして多くの読者を獲得し、映画化やラジオドラマ化されるなど広く大衆に消費された小説である。それは、「美徳のよろめき」以降、妻たちの不倫を描いた〈姦通〉が、〈よろめき〉や〈よろめき夫人〉という言葉で表されていくことからわかる。小説が一つのブームの代名詞のようになったわけだが、このような事態は三島のみに限られたものではなかった。当時、飛躍的に拡大していたメディアの状況のなかで、どのように振る舞うかは文学に携わる者にとって共通の問題であった。メディアの勢力が文学の領域に踏み込んできた状況について、十返肇は「『文壇』崩壊論」（『中央公論』昭和三一・一二）で、「現在では、その作品が文学として高く評価されなくても、題材の関係で週刊雑誌のトピックとなったり、映画化

中 元 さおり

されたりすると、すぐに文藝雑誌が執筆を依頼し、作者は「小説家」としてジャーナリズムに待遇され、「文壇作家」の一員として、いわゆる玄人と社会的には同じ圏内の住人となる。もはやそれになりたいして抗議する玄人作家はいない。なぜならば抗議すべき地盤としての文壇なるものがなくなつたからだ」と、かつての文壇がジャーナリズムに浸食されている現状を指摘している。作家や作品を大々的に売り出していくために、人気俳優陣による映画化と文学賞の受賞というマスコミ的なトピックが効果的な方法として、昭和三十年代前半あたりから見出されていたことはいえるだろう。

文学がそれ単体ではなく、他のメディアとの融合のなかで大衆に受け取られていくなか、三島はいかにメディアとの関係をむすんだのだろうか。この問題を考える一視点として、〈よろめき〉ブームを起こした「美徳のよろめき」を取り上げ、この小説がなぜ大衆に消費されるものとなつたか、広く読まれたことの検討をおこなう。

三島が同時代の読者のどのような欲望に反応したのか、また「美德のよろめき」にみられる〈時代の空気〉とはどのようなものだったのだろうか。三島の時代感覚をあらわすテキストとして、〈姦通〉の描かれ方をおして「美德のよろめき」を考察していく。

## 一

まず、「美德のよろめき」をめぐる当時のメディアの状況と三島の動きを簡単に整理しておく。「美德のよろめき」は、いわゆる〈姦通小説〉で、若い人妻倉越節子の婚姻外の恋愛を描いた小説である。中産階級の人妻が昔なじみの男である土屋と再会し、官能に目覚め妊娠・中絶を繰り返した末に別れを決意するまでの一年間を描いている。三島は、「美德のよろめき」発表の前には「潮騒」（新潮社、昭和二九・六）、「金閣寺」（『新潮』昭和三一・一〜十）、「永すぎた春」（『婦人倶楽部』昭和三一・一〜十二）と話題作を発表し、ベストセラー作家の仲間入りを果たしている。また、これらの作品は続々と映画化され、さらに注目を集めた。作家としての三島への関心もこのあたりから高まっていく。一躍人気作家となった三島は、さまざまな姿でメディアに登場するようになる。昭和三〇年秋にはポディビルを始め、肉體改造に取り組み、その結果肉體を誇示する作家としてのイメージが定着していく。そのようななか発表された「美德のよろめき」は、三〇万部を越えるベストセラー小説となり、〈よろめき〉〈よろめき夫人〉などの流行語が生まれた。三島作品のなかでも、

ひとときわ大衆読者を獲得した作品といえる。

「美德のよろめき」は、単行本が刊行されて四ヶ月後の昭和三二年十月に映画が公開されている。映画「美德のよろめき」（日活）は、中平康が監督し、新藤兼人が脚本を担当した。月丘夢路と葉山良二が主演をつとめ、話題作となった。また、この映画化以前に矢代静一の脚本でラジオドラマ化もされており（昭和三二年九月一日、二二日の全二回）、メロドラマとしての人気が高かったことがうかがえる。さらに、昭和四三年、平成五年、平成六年にもラジオドラマやテレビドラマ化されており、映画やドラマの原作として人気の高い小説であることがわかる。<sup>1</sup>

昭和三〇年前後の文学とメディアをめぐる状況は、大きな変化をみせていた。昭和三一年には石原慎太郎の「太陽の季節」が芥川賞を受賞し、映画化されて〈太陽族〉なる若者文化が登場し、文壇だけでなく社会的なブームとなっている。また、「美德のよろめき」と同年に発表され、その年のベストセラー一位となった原田康子『挽歌』も、無名の新人作家の作品が話題となり女流文学者賞を受賞し、映画化されている。石原や原田のような若手作家の文学賞受賞と小説の映画化という流れは、急速に拡大したメディアのなかで文学界も映画界もともに商業的成功をおさめるパターンとして、その後多くの作品に影響を与えていく。

このようなマスメディアと文壇の境界線があいまいになっていった事態について、山岸郁子は「文壇」の喪失と再生―週刊誌がも

たらししたもの―」(『文学』平成一五・一一／一二)で次のように指摘している。

平野謙が「新進作家が平気で新聞小説を書くという事実は、すくなくとも大正時代にはみられなかった」(『文芸雑誌の役割』『朝日新聞』一九六一・九・一三)と言うように、文芸雑誌と新聞の間、さらには文芸雑誌と中間雑誌の間には深い溝が横たわっていた時代が確かにあつたのである。しかし一九五〇年代の流行作家はそれにとられることなく自在にメディアを横断していた。それは活字メディアばかりではなく、テレビ・ラジオ・映画へも、さらには自ら講演会に登場し、自著の広告にも努めている。激しいジャーナリズムに調子を合わせる瞬発力と自在性が流行作家にはなによりも必要とされていた。

戦後、大衆文学や中間小説が存在感を強めていった状況のなか、文学者はみなその存在を無視することはできなかった。急速に拡大していくメディアのなかで、作家としての自分の存在感をいかに打ち出していくかは、全ての作家に共通の問題意識であつた。荒正人は『小説家―現代の英雄』(カッパブックス、昭和三二・一〇)で、石原慎太郎など若い世代の作家の登場により、作家の居場所が文壇からメディアのなかへと変わっていった状況を眺め、「小説家は『文士』という反逆者から英雄に変わってしまった。マス・コミの王者

である」と、小説家の変質を指摘しているように、三島も戦後のメディアのなかに常に自己をさらし続けたのである。そのようなメディアの隆盛のなかで、文学の流通も大きな変化を迎える。小説が発表後すぐに映画化やドラマ化されていくという一つの流れが顕著になってくるのだ。メディア・ミックスのかたちで商品としての文学作品を流通させていく方法がさかんとられるようになっていくなか、三島もまた無縁ではなかつた。むしろ、ベストセラー作家としての話題をさまざまに振りまいていくことで、常に作品への注目を保とうとしたのかも知れない。もちろん、三島が商業的な成功のみを追っていたとは考えにくいのだが、メディアが勢力を伸ばしていく時代のなか、生存が危うくなっている旧来の文壇という場に安住することを三島は意識的に避けていたように思える。積極的にメディアの力を利用し、作品と作家イメージを大衆のなかに流布させていった点において、三島は戦後という時代を存分に利用した作家であつたといえる。

## 二

「美徳のよろめき」は、妻の不倫を描いたものだが、婚姻外の恋愛、特に妻が夫以外の男と関係をもつものを題材とした作品は、小説、映画ともに昭和二〇年代後半から三〇年代にかけて大衆の関心を集めていた。恋愛小説のなかでも、いわゆる〈姦通もの〉と呼ばれるジャンルが戦後に目だってくる。大岡昇平「武蔵野夫人」(『群像』

昭和二五（一九）をはじめとして、一気に人気ジャンルに発展していく。映画でも、昭和二八年（一〇）月に日本公開されたハリウッド映画「地上より永遠に」（監督フレッド・ジンネマン、出演バート・ランカスター、モンゴメリー・クリフト、デボラ・カー）や昭和三〇年日本公開の「情事の終り」（監督エドワード・ドミトリク、出演デボラ・カー、ヴァン・ジョンソン）など姦通を描いたものがヒットしている。

昭和三十一年には井上靖「氷壁」（『朝日新聞』昭和三二・二・二四～三二・八・二二）が新聞小説のなかで姦通を描いて話題となった。<sup>3</sup>「美德のよろめき」が発表された昭和三二年には、原田康子「挽歌」、谷崎潤一郎「鍵」と〈不倫もの〉〈姦通もの〉が三作もベストセラーになるなど婚姻外の恋愛を描いた作品は広く読まれ、「美德のよろめき」以降、この人気は〈よろめき〉ブームとしてより一般に浸透していく。<sup>4</sup>

当時の〈よろめき〉小説の主な読者層について、十返肇は評論「なぜ姦通小説が流行するのか」（『婦人公論』昭和三三・一一）で、姦通が女性たちの関心を集めるようになったのは近年のことで、「戦後、姦通罪が廃止されるまでは、多くの女性にとつて、姦通などということは、恐らくほとんど念頭にうかばなかったものではあるまいか」と論じている。姦通という題材自体は特に目新しいものではなく、日本近代文学においては夏目漱石「それから」（『東京朝日新聞』『大阪朝日新聞』明治四二・六・二七～一〇・四）や、有島武郎「或

る女」（『白樺』明治四四・一～大正二・三、初出時の題名は「或る女のグリンプス」）などがよく知られているが、広く女性の関心を強く惹きつけるようになったのは、戦後の「武蔵野夫人」以降だろう。

〈姦通もの〉に対する女性読者の関心の高さは三島自身も承知していたようで、女性読者を想定して「美德のよろめき」を書いていたような発言がみられる。<sup>5</sup>三島は当時の大衆の関心の方向や時流を見据えた上で、「美德のよろめき」を書いているといえるだろう。「美德のよろめき」は、拡大していくメディアの状況と、文学が大衆化していく時代において、いかに三島由紀夫という作家を位置づけるかという三島自身の試みでもあったのだ。

「美德のよろめき」について三島は、「何もムキになって書いた小説ではない」と述べ、「シャレた小説を書きたい」という意味では一生懸命書いたが、「意図とか主題とかそういうものは大したものじゃない」と軽い調子で語り、流行作家としての余裕のようなものをにじませている。<sup>6</sup>美と観念を描いた芸術性の高い「金閣寺」の直後に書かれたこと、姦通という通俗的な題材を扱っていること、大衆的な読者に読まれ〈よろめき〉ブームを巻き起こしたことなどから、「美德のよろめき」は大衆小説として広く読まれたものの、総じて評価は高くはない。たとえば山本健吉は「姦通小説論」（『群像』昭和三三・十）で「『金閣寺』を書いた氏にとつては、これはむしろ息抜きとしての仕事」と、〈よろめき〉ブームを傍目にみながら文学的な側面には厳しい評価を下している。また、新潮文庫版「美

徳のよろめき』の北原武夫による「解説」(昭和三五・二〇)では「氣楽にのびのびと書いたのが、この『美徳のよろめき』ではないかと思ふ」とし、「芸術家としての氏の揺るがぬ自信」が「氣安さ」で「全編に浸透している」という言葉がみえる。「美徳のよろめき」を論じる際には、直前に書かれた「金閣寺」との対比によって、その評価が下されるという流れがある。このような発言の背景には、純文学と大衆文学を峻別する評者の意識がうかがえる。また、近年においてもセシル・サカイは『日本の大衆文学』(平凡社、平成九・二)で、大岡昇平や三島のような純文学系の作家がそれぞれ「武蔵野夫人」や「美徳のよろめき」といった〈姦通もの〉というジャンルの小説を書き話題になったことについて「これらの作品は大岡昇平にとっても三島由紀夫にとっても例外的な試みであり、利益の上がる仕事として一時的に大衆小説の世界に侵入したにすぎない」と述べており、三島において「美徳のよろめき」は芸術活動の余技であるという位置づけをしている。

これまでの「美徳のよろめき」評は先にあげた三島の言葉を参照するかのようになり、力を抜いて書いたもの、または大衆に迎合したものととして、そのテキストそのものについてはほとんど論じられてこなかった。ほぼ同時期に三島が純文学系の「金閣寺」と大衆小説的な「永すぎた春」や「美徳のよろめき」を書いていたことから三島の優れたバランス感覚を評価する論はあつたが、大衆小説というジャンルに対する三島の意識はまだまだ判然とはしていない。そこで、

ベストセラー小説としての「美徳のよろめき」について、テキストの同時代背景に着目しながら「美徳のよろめき」にみられる「時代の空気」とはどのようなものなのか、また、読者のどのような欲望にこたえたテキストだったのかを考察していく。

### 三

まず、「美徳のよろめき」の時代背景についておさえておきたい。先に述べたように、戦後になると姦通を描いた作品が人気となったが、それは昭和二十二年の姦通罪の廃止の影響があつたといえる。姦通罪の存在は、「有夫ノ婦」である妻たちの結婚観を長らく規定し、見えない鎖で夫婦関係をつなぐものであつた。姦通罪の廃止により、婚外恋愛について直接的な罪に問われる恐怖から妻たちが逃れることができるようになった一方で、このパラダイムシフトは夫たちの不安をおおるものであつた。大岡の「武蔵野夫人」では作中時間が昭和二十二年六月から十一月にかけて設定されており、姦通罪の施行直前までの物語となっている。「武蔵野夫人」の主人公道子は姦通をおかすことはなく最後まで一線を守り貞潔のために自死を選択するが、スタンダール研究者である夫の秋山が姦通罪について議論をする場面があり、姦通という問題を正面から取り上げている。「武蔵野夫人」のほかにも、大衆小説の分野で〈姦通もの〉の小説は多くみられようになる。

このような流れをうけて、週刊誌や女性誌などにも夫婦間の浮気

をめぐる言説が増加してくる。特に、昭和三〇年前後から浮気を話題にした記事は増加をみせるが、話題は夫の浮気問題から妻の浮気へとシフトしている<sup>9</sup>。夫婦の不貞問題やそれにまつわる性の解放に大衆の関心が向かっている状況のなかで書かれた「美德のよろめき」について、小笠原賢二は「たぶん三島は、若きライバルの石原を十分に意識しながら、『美德のよろめき』を書いて相応の効果をあげたのだと思われる。映画化されることによって一層ブームが加熱したこれらの作に見られる過剰な快楽・享楽志向は、自由で新しい時代と共振したエネルギーの、奔放な発露に違いなかったろう<sup>10</sup>」という指摘をしている。小笠原が論じているように、三島の意識には石原慎太郎の「太陽の季節」（昭和三〇）があっただろう。戦後における性の解放は、夫婦間の問題だけでなく、若者にとっても大きな関心事だった。敗戦直後のカストリ雑誌の流行から始まり、田村泰次郎の小説『肉体の門』（昭和二三）や、映画では「十代の性典」（昭和二八年）から始まる〈性典もの〉ブームなど、性をテーマにしたものが目立ってきた。このような性への関心は、昭和三〇年代にも引きつづきみられ、〈よろめき〉ブームとなっていく。

では、〈よろめきもの〉は妻たちにどのように受けとめられていたのだろうか。例えば、昭和三二年二月二十九日号の『週刊朝日』では、今年一年の動きを総括する記事「1957年・今年の日本はどこまでよろめいたか？」が特集されているが、そのなかの一つに戸塚文子「〈女性〉よろめきの本家」というものがある。この記事

では、昭和三二年の〈よろめき〉ブームと現実の妻たちの関係について次のように言及されている。

本家中の本家（よろめき夫人）にしてからが、映画や文学作品のデッチ上げた虚構ではない。「挽歌」や「美德のよろめき」「雌花」（引用者注・大岡昇平、昭和三二）「渴き」（引用者注・太田経子、昭和三二）などの売れる根底で、現実の妻たちが、今年が多いによるめいた。それも明治、大正の極めて稀な、有名夫人の例外的事件とは違って、一般の奥様やおかみさんたちが、新聞のニュースにもならず、街のあちこちで人知れずよろめき続けたわけである。（中略）つまり〈よろめき夫人〉は〈極めて稀な〉例外から今や一般に普及し、大衆化したといっている。それに離婚という破局までは行かない軽い〈めまい〉程度の〈よろめき〉を加えると、じつさいの数字としては、つかむことのできないその数は、たいへんなことになりそうだ。

〈よろめき〉ものというジャンルの物語がフィクションではなく現実感をもったものとして、読者である女性たちに受けとめられていたことがこの記事からわかる。週刊誌の記事であることから、いくらか扇情的なきらいはあるが、妻たちの性への関心の高さは、姦通罪の廃止をうけて一気に解放されていったようである。戦後の性の解放は、女性が個人としての性を獲得したことを意味する。近代

的家制度のなかに囲いこまれ、妻と母という役割のなかで生きていた妻たちが、妻・母のほかにもう一つ女という役割を手にしていくなかで、性の解放が象徴したのは、それまでの道徳的な拘束からの自由である。妻たちが、従来の家制度から自由を獲得していく方法として、〈よろめき〉という行動がクローズアップされていたのである。

そして、小説や映画、昼間のメロドラマなど〈よろめき〉ものの作品が女性たちに支持された背景には、妻や母として振る舞う日常からの脱出願望がある。ここに姦通罪廃止後の風景をみることでできる。婚姻外の恋愛という新たな関係の構築が、自己の輪郭を確認する手段として浮上しているのである。たんに姦通罪が廃止され、性が解放されたからといった理由で妻たちが恋愛に走ったわけではなく、日常からの束の間の逃走によって自己の輪郭を確かめたいという試みだったのである。〈よろめき〉ものの作品は、そのような女性たちの潜在的な欲望を引き出したのではないだろうか。さらに、読者である女たちはその物語を自己に引き寄せ、内面化していったのだ。このような点において、「美徳のよろめき」は大衆小説としての役割を担っていたといえる。

〈よろめき〉ブームと〈よろめき〉ものと呼ばれる作品の関係について、遠藤周作は「姦通論—愛と情事についての考察—」（『婦人公論』昭和三四・九）というエッセイで、ラジオのメロドラマの聴取者や「美徳のよろめき」の読者である妻たちの心の動きについて

解説を行っている。遠藤は〈よろめき〉ものの作品を見たり読んだりしても、妻たちは実際に家庭を破壊してまで姦通する勇気がないが、姦通罪がなくなった今〈よろめき〉は「心を疼かせる要素」をもって誘惑に満ちていることを指摘している。そのうえで、「あなたはラジオをきくことによって、姦通を描いた小説を読むことによって現実にはやる勇気がない衝動をここで解放せしめることができる」と〈よろめき〉ものの物語の享受者となることで姦通を踏みとどまることができるという効能を示している。遠藤の言葉は、夫の側からの忠告めいた感があるが、一方で読者と大衆小説との関係についても物語っている。現実を抱えている欲望をフィクションのなかで成就させること、つまりこの場合〈よろめき〉ものの小説や映画が、実際の妻たちの浮気という欲望の代償行動としての機能をもつことが説明されているのだ。

この遠藤の理論を「美徳のよろめき」に敷衍させると、主人公節子の不倫の恋は読者の欲望を刺激するとともに、小説の主人公に自分の欲望を代償行動させて読んでいるということになるだろう。女性読者は「美徳のよろめき」という物語を自己の欲望と向き合いながら読み、物語の内容を内面化していくという相関関係にあったといえるだろう。

また、「美徳のよろめき」の節子の姦通がファッショナブルに描かれていたことも、女性読者をとらえたポイントであろう。というのも、「美徳のよろめき」では節子は三度も妊娠・中絶を繰り返し、

土屋との関係は悲痛なものとなっていくのだが、その一方で節子と土屋の振る舞いにはハイブローな風俗がまとわせてある。例えば、節子が土屋との逢い引きのために身支度をする場面の描写をみてみたい。

来週の火曜日、その日が来てみると、節子は久々に、身じまひと化粧との、目的のある新鮮なたのしみに溺れた。下着に凝つてゐたので、絹の焦茶のスリッパを着る。そのスリッパのへりは、沈んだうすい冬のやうな青で染めたレスでふち取つてある。その上から薄茶のシース・ドレスを着る。常用の香水、ジャン・パトウのジョイをつける。（三）

土屋に会いに行くために節子が身につける装身具は、どれも贅沢で趣味の良いものである。「美德のよろめき」には、このように節子のファッションが細かく書きこまれている。節子のファッションについての描写は挙げればきりがなが、土屋の好みである筋目に入ったストッキングも二人の関係がより深くなつていったことを物語る小道具として印象的に描かれている（第十節）。また、節子の恋愛の相手である土屋の外見が「ロマンチックな外見」（五）であることや、二人が逢い引きする海岸の小さなホテルや避暑地のホテルなど、贅沢でエレガントな恋愛模様が演出されている。節子のエレガントな洗練されたファッションは、彼女が「上品な一族」（一）

の出であるという「一定の階級の特徴を堅固にあらわして」（一）いよう。

「美德のよろめき」に描かれた恋愛の風景はディテールまで凝っており、まるで女性誌のグラビアのようなカタログ的な側面がある。細かく書き込まれた節子のエレガントなファッションと、横にたたくロマンチックな青年。彼らが海岸や避暑地のホテルで人目を避けて逢瀬を重ねる姿は、女性読者にとってありありと目に浮かぶものであつただろう。昭和三年三月に『主婦の友』が大型化しグラビアページを充実させたのをきっかけとして、『婦人倶楽部』『婦人生活』も大型化しビジュアル面を強化していった。これらの女性雑誌のグラビアを飾つたのは、エレガントなファッションである。

読者である一般的な主婦層にとつて、少し贅沢なライフスタイルがそこには展開されていたのだが、まさに「美德のよろめき」の節子は女性誌で紹介されているようなものと重なる。「美德のよろめき」は、姦通や妊娠、中絶といった苛酷な出来事にさらされ、墮ちていく女性を描いてはいるのだが、エレガントなライフスタイルを伝えるディテール描写によつて、その悲惨さはいくらか回避されている。むしろ、女性読者たちはテクストにちりばめられた優美で上品な小道具と設定そのものに、羨望の眼差しをむけながら「美德のよろめき」を読んでいたのではないだろうか。節子の恋愛は苛酷なものではあつたが、全体的にはエレガントな物語として受け止められ、だからこそ節子の（よろめき）行為は、女性たちの願望の投影とし

て描かれているのだ。

#### 四

このような時代背景をもつ「美徳のよろめき」について、佐藤秀明が「三島は時代の空気が読めていた」とし、「快樂に関して道徳的なくびきのないことは、読者を解放に導く。三島は、『太陽の季節』後の女性読者が、性的に解放されたがっているというよりも、道徳的なくびきから解放されたいと欲しているのを知っていたのである」（『日本の作家100人 三島由紀夫—人と文学』勉誠出版、平成一八・二）と論じているように、「美徳のよろめき」は性的な解放だけでなく、これまでの道徳観からの解放を描いている。しかし、「美徳のよろめき」の節子が何度も妊娠と出産を経験することは何を意味しているのだろうか。節子が受ける肉体的、精神的な辛苦は「道徳的なくびき」からの解放という解釈では説明しきれない問題である。土屋と関係を結んだ約一年のあいだで三度にもわたる中絶手術は、節子にとって大きな苦痛を伴う体験である。

節子を待ち構へてゐた地獄がここに在つたのを節子は知つた。横たはつた彼女は手足を固く縛られた。手術のはじまる前から、その掌には冷たい汗がしとどになつた。

きつと私は死ぬだらう。汚名の中で、不名誉の只中で、私は死ぬだらうと節子は思つた。（一八）

節子の中絶は、死に結びついていくほどの体験として語られる。三度の中絶という設定には少し強引さを感じてしまうが、いずれにせよ土屋との〈姦通〉を犯したことの報いとして、節子の体が過剰に傷つけられていくこととなるのである。

「美徳のよろめき」が姦通小説であるとともに、「妊娠小説」でもあることを指摘したのは斎藤美奈子の『妊娠小説』（筑摩書房、平成六・六）だが、このように中絶が執拗に描かれる背景には、戦後になっておこつた妊娠をめぐる状況の変化がある。藤目ゆき『性の歴史学』（不二出版、平成一一・三）によれば、「第二次世界大戦の敗戦からの一〇年間は、日本における性—生殖統制が現代的に再編される時期」であり、「この間に、優性保護法の制定により妊娠中絶は実質的に自由化され、人口政策は「産めよ殖やせよ」から出生抑止へ転換し、また公娼制度を規定してきた貸座敷・娼妓取締規則は廃棄され、売春防止法が制定されている」という流れがあつた。昭和二三年の優性保護法では、「不良な子孫」の出生防止や経済的理由も中絶のための理由とされるようになった。しかし、まだこの時期は中絶許可申請に時間がかかるため、「ヤミ墮胎」が依然として主流だった。昭和二七年には、優性保護法指定医師一名と本人、配偶者の同意があれば中絶できるよう手続きが簡略化された。斎藤はこういった制度の整備を「五二年体制」と呼んでいる。これをきっかけとして、昭和二七年以降中絶数は激増することとなった。昭和

三〇年には年間で一一七万件もの手術がおこなわれ、ピークに達している。<sup>12</sup>

このように妊娠、出産をめぐる状況は戦後に大きな変化をみせているが、そのような時代を背景とした「美德のよろめき」では、中絶は先の引用にみられるように、死と結びつく危険な行為であることが強調して語られている。斎藤は、中絶によって主人公の命が死の危険にさらされることを「ヒロイン殺し」と名付け、このような物語は「時代の要請にマッチしていた」と指摘している。現実的な問題として突如ブームとなった妊娠中絶をどう受けとめたらよいか困惑するジャーナリズムは、中絶は危険であることを喧伝した「肉体脅しキャンペーン」をおこない、その結果、中絶は「死ぬ・痛い」というイメージで語られるようになったと説明している。では、実際に中絶や墮胎に関してどのようなことがメディアのなかで言われていたのか、以下にいくつかの雑誌の見出しをかかげる。

- ・『週刊朝日』（昭和二九・四二・四）「墮胎は空前の活況」
- ・『週刊読売』（昭和三一・九三〇）「婦人科医の診察室 婦人科ブームのかげに 一五才のバージン・バース」
- ・『週刊サンケイ』（昭和三二・一二・二二）「人工中絶が招いた悲劇 医師のミスで妻を失った男の復讐」
- ・『文化生活』（昭和三三・二〇）「〈出産抑制〉大流行 考えたい有害な中絶」

ここに挙げたのは、ほんの一例でしかないが、この時期の週刊誌には中絶数の顕著な増大と、中絶を死と結びつけて語るものが多くみられる。そして「美德のよろめき」の節子もまた、中絶手術によって何度も擬似的な死を体験している。節子は中絶手術で擬似的に死を体験することで、土屋との関係を清算していこうとする。二度目の中絶のときには、もはや中絶の痛みを乗り越えたことで「自分は情慾をのりこへた」と語り、「たしかに何かが終った」と感じている。しかしまだ土屋への思いを完全に断ち切ることはできておらず、三度目の妊娠・中絶をおこなう。

「さあ、二度目の消毒をいたしますよ」

といふやさしい言葉を、節子は苦痛のはての、極度の苦味がもはや甘味としか感じられぬやうな、感覚の尺度を失った状態で聴いた。それにもかかはらず、彼女はこれが死ぬことだとは思はなかつた。苦痛とそれに耐へてゐる自分との関係は、何か光りかがやくほど充実していて、それがそのまま死の虚脱へつづいてゐるとは思へなかつた。節子がゐて、苦痛がある。それだけで世界は充たされてゐる。葬り去られる子供のことも念頭にかばぬ。……もはや節子は、土屋の名をさへ呼ばなかつた。

（二七）

中絶行為は、擬似的な死を意味している。節子にとって妊娠・中絶は、姦通という関係性のなかで官能を恣にしたことよって受ける罰である。そして、擬似的な死を体験することよって、節子はその都度生まれ変わりを体験しているが、三度目の擬似的な死でようやく土屋との別れが決定的になるのだ。節子の一度目の中絶は、土屋との子供ではなく夫との間にできた子供である。しかし、それすらも土屋の子供だと思ひ込もうとする節子の心理には、官能の行く先に「生と死」という帰結が待ち構えていることの予感である。節子にとって官能とは一時的なものではなく、常に現実的な結果をもたらすものとしてあり、そのことよって自分は罪を背負わねばならないという負荷を帯びたものである。

「ウィットを持たない上品な一族」(一)の出である節子は、自分の内面を表現する言葉を持ち合わせていない。したがって、テキストの語り手がいたるところに顔を出し、節子の内面に説明をほどこしていく。語り手はときに「節子のために言っておかねばならないが、かういふ考へは実に真面目で、彼女がこれほど自分の内面に深く錘りを下ろしたことはなかつたのである」(五)というように、節子の内面に介入し、節子が知り得ないことや語り得ないことを言語化していくのである。土屋との官能に溺れていく節子に対して、佐藤が指摘しているように語り手の手厳しい批評はなく、「語り手よって支持されている」<sup>15</sup>が、テキストでは節子に対して三度もの中絶という受苦が与えられているのだ。

ここに、「美徳のよろめき」の姦通に対する意識があらわれている。つまり、節子に官能をもたらし、目を開かせるような体験として姦通を描きながらも、その結末には妊娠・中絶という現実的な事態が待ち構えているという皮肉な視点がある。同時代の女性たちの解放感に共感しながらも、既存の道徳観念が依然として強固なものであることを語っているのである。節子に対する中絶という受難は、社会的・倫理的なタブーを犯した結果としての制裁である。姦通罪が廃止され、女性たちは自分の性について自己決定する権利を持っていることを自覚し始めたという同時代の状況をテキストに取りこみながらも、節子には手厳しい罰が度々与えられるのだ。性の解放が話題となり、姦通罪がなくなつたとしても、やはり不貞をはたらくことは倫理的観点からすれば、依然としてタブーである。そもそも、節子という人物は「偽善」のなかで生きてきた女性である。「偽善といふものに馴らされて」(一)きた節子にとって、美徳とは偽善にほかならない。土屋との別れを決意させる彼女の意識を支えるのも、「偽善の裡に住みさへすれば、人が美徳と呼ぶものに対して、心の渴きを覚えたりすることはなくなる」(一八)のであり、節子は美徳である偽善のなかで揺れ動きはするものの、その規矩を越えることはない。そのため、節子は三度もの中絶手術や麻酔を使わない苦痛に満ちた手術の方法を受け入れるのである。

また、テキストにみられる月経や妊娠への過剰な意識は、節子にとっては官能の帰結が妊娠しかないということの意味している。肉

体的な官能の享受をそのまま個人的な快樂として感じることは許されておらず、節子は常に妊娠という事態を気にしなくてはならないのである。節子は「まことに官能の天賦にめぐまれていた」（一）にも関わらず、官能を享受することはできないのである。

## 五

ここでこのテキストの語り手について考察しておきたい。先にも触れたように語り手は主人公である節子の内面を越えて物語に介入し、節子に対して評価をくだしていく。この前景化してくる語り手について、十返肇は語り手を作者と同定し、「作者が読者に意図を無理矢理に押しつけたような感じを私は受ける」と、物語を操作する語り手の姿が見えすぎることを指摘している<sup>14</sup>。さらに、「倉越節子という女主人公が、最初から作者の意図をいかすための傀儡として設定されていて、ほとんど血肉を与えられていないように思われた」と十返が述べているように、テキストの冒頭から語り手は前面に登場し、節子について解説をしていく。「いきなり慎みのない話題からはじめることはどうかと思はれるが、倉越夫人はまだ二十八歳でありながら、まことに官能の天賦にめぐまれてゐた」（一）といった調子で、テキスト全編において節子の内面や、本人が知り得ないことを読者に向けて説明している。十返が指摘するように、節子は語り手の支配下にあり、語り手は読者に向けて節子の内面を詳細に解説している。

その一方で、土屋の内面はほとんど語られることはない。土屋については、節子がとらえたその表情が描写されるのみである。「心理の理論化をすみずみまで生き渡らせながら、他方でロマネスクのもう一つの条件であるはずの作中人物間の幾何学的な心理の交錯を排除し、みずからをあえて「一方的な姦通小説」たらしめる」と梶尾文武が語りについて論じているように、「美德のよろめき」には恋愛をめぐる両者の心理の葛藤は語られていない。節子は土屋の外からその心理を推測しようとするのだが、それもまた存分にはなされていない。たとえば次のような箇所には、土屋の心理を推し量ろうとする節子と、その力不足を揶揄する語り手がみえる。

この青年には何か情熱の法則を免れてゐるやうなところがあつた。節子が読書に親しまないことは最初に述べたが、わづかに呼んだ数冊から判断して、このやうな場合を描いた小説の中の恋人に、彼ほど似ても似つかぬ男はなかつた。なるほど容姿は節子の好みに叶ひ、さういふ登場人物らしかつたかもしれない。しかし彼の感情の動き、彼の反応、彼の行動、彼の情熱、……すべてがいかにも小説的な規矩を外れてゐて、そのあまりの落着きやうは、端倪すべからざるものがあつた。

節子は女らしい目でしか恋人を見なかつたから、そこに何も発見しない。もし知的な女が土屋を見たならば、かうした彼の因れない感情の無力感に、正に時代の兎の特徴を読み取つた

かもしれないのである。(一一)

ここには、通俗的な恋愛小説や姦通小説を参照する語り手の言葉がみえる。土屋が「いかにも小説的な規矩を外れて」いることに言及しながら、この物語自体を恋愛小説や姦通小説というジャンルのなかで相対化している。それは、節子に対する語り手の評価的な態度とも共通する。節子を常に冷静に見つめ、批評する語り手の存在が、節子自体を相対化し、「美徳のよろめき」というテキストを相対化していく。そのため、十返が指摘したように節子が作者の「傀儡」のように動かされ、滑稽じみてくるのである。土屋の内面があまりいいなのは、節子に見抜く力が欠如しているためであることを語り手が解説しているが、節子は常に語り手によって不足や欠落を指摘されていく。節子の欠落を指摘し、それを補う言葉を連ねることによって語り手の姿は顕在化してくるのである。

そもそも姦通小説では女主人公はたいがい悲劇的な死を迎える。これは、姦通小説というジャンルの定型ともいえるが、「美徳のよろめき」ではその死が中絶という形で与えられている。節子に身体的な苦痛が与えられていく点において、このテキストは姦通小説というジャンルのパターンを踏襲している。その死のかたちが、悲劇的な死ではなく、同時代の女性にとって身近な問題であった中絶にすり替えられたのである。このような事態を、皮肉な視線で語る語り手の態度も、姦通小説というジャンルに意識的なものである。語

り手は、節子を時に厳しく突き放すことにより、よくある姦通もののメロドラマに徹底させないようにしている。悲劇的ではあるが、メロドラマ的な要素を慎重に排除しようとしている語り手の存在には、姦通小説をメタな視点から捉えようとした三島の意識がうかがえる。

### おわりに

「美徳のよろめき」における節子を見る語り手の視線について、「大人の男」が「未熟な女」を見る視線であると斎藤が指摘したように<sup>16</sup>、語り手と節子の関係は気になるところである。時に冷たく、また揶揄するかのよう節子を語る語り手にいくらか重なる人物としては、節子の父親の存在は無視できない。藤井景安という大人物めいた名前をもつ父は「国家の正義を代表するやうな」(一八)地位にあることが語られる。そして、「節子はとりわけ父に愛されてゐた。決して依怙ひいきをするやうな父親ではなかつたが、節子は数ある娘のなかでも特に父になつき、又父の目から見ると、彼女は一等たよりなく、何らかの庇護をたへず必要としてゐるやうに見えた」(二八)とあるように、父は節子を常にかげから見守っている。節子の父は「世の敬慕的」(二八)となる人徳をそなえた人物で娘を揶揄するような視線はもってはいないが、父の言葉により節子は土屋との関係を清算する決心を得て、妻としての元の日常へと引き戻されていく。節子は父との会話から、本来の自分の姿を見出し、

自分が恋愛劇に向いていない人物であることを再発見するのだ。ユーモアと機智に欠けた父との会話から節子は生家の空気を思い出し、「節子にはわかつた。ここ一年の不まじめな情事に揉まれて、私は機智に疲れたのだと。それがどんなにすばらしい機智であるにもせよ、節子は機智に馴染まぬ生まれつきではなかつたか？」（一八）と、土屋との恋愛から抜け出すきっかけをつかむ。「国家の正義を代表するやうな」父とは、要するに世の中の道徳や倫理の規範の象徴としての存在でもあり、節子はその父親の存在によって日常へ戻るのである。

かつて姦通罪があつた時代のように、制度としての罰が節子に与えられるのではなく、あくまでも父親が体現している〈美德〉によって節子は規制されていくのだ。語り手が語る節子の中絶もまた姦通を規制するものであり、節子の欠落を殊更に語る語り手は、父親の視線と重なるものだろう。語り手の内には、節子を愛でる父親よくな視線と、節子を苦しめいたぶる視線の二つがあるのだ。そして、節子に与えられる中絶という罰は、制度からの罰ではなく、道徳的価値観からの制裁である。それは父親が体現する「国家の正義」とつながっていく。

「美德のよろめき」には、大衆の欲望を取り込み刺激するようなかたちで姦通と性の解放が描かれている。その点において「美德のよろめき」は〈よろめきブーム〉をおこし映画化されるなど大衆の圧倒的な支持を得たのである。しかし、官能の解放の結果、中絶と

いう痛手を負うことになる節子の最後の姿をどう解釈すればよいのだろうか。戦後になって手に入れたかのように感じた性の快楽も、節子にとっては常に生殖行為としての性——家族や血縁から逃れられないという官能の不可能性が「美德のよろめき」で展開されている。節子が体現する官能の不可能性は、語り手の辛辣な態度や節子が受ける受難として描かれ、読者はそれを悲劇として読み取っていくのである。

しかし、ここにあらわれているのは、姦通や恋愛の不可能性だけではなく、〈美德〉という名で呼ばれる規範意識の強固な根強さである。戦後の体制の転換で姦通罪が廃止されようとも、節子の父が体現している〈美德〉は揺るぐことはない。法で規制されることがなくとも、〈美德〉という世間の価値基準が人を規制し裁いてくという皮肉な事態がある。高度経済成長という新たな近代化路線による家族中心主義の徹底化によって、さらに妻の官能は不道徳なものとして強く規制されていく。まさに関礼子が指摘するように、節子は「夫・愛人・父という男たちの包囲網のなかにいる」のであり、それゆえ「性愛の主体になることも、そしてそれらのすべてを自分の言葉で封印することも不可能<sup>17</sup>」なのである。父が「国家の正義」を代表する人物であることは、節子が抵抗し逃れることができない絶対的な力を意味する。寛厚な人となりながらも、節子にとっては父の存在は大きな権力として君臨しているのだ。「美德のよろめき」では戦後における解放とその不可能が、官能を通じて扱

われている。旧弊の価値観は規範が無効となり自由を手にしなからも、すでにそこには新たな規範意識が確固として存在し、明文化されていないその規範意識が再び人を規制していくという戦後社会への問題意識があらわれているのである。

今後は、〈姦通小説〉というジャンルにおける「美德のよろめき」の位置づけについてさらに考察を進めていき、三島の同時代への意識を探っていきたい。

## 注

(1) 「美德のよろめき」の映画化、ドラマ化については以下と  
おり。

①昭和三三年九月十五、二二日

ラジオドラマ 淡島千景ドラマ集「美德のよろめき」(全二回)

ニッポン放送 脚色／矢代静一

出演／淡島千景、中村伸郎

②昭和三三年十月

映画 日活 監督／中平康 脚本／新藤兼人

出演／月丘夢路、葉山良二 未ソフト化

③昭和四三年九月九日～十月五日

ラジオドラマ 東西傑作文学「美德のよろめき」(全二四回)

TBSラジオ 脚色／和泉二郎 出演／岩崎加根子

④平成五年六月二八日、七月五日

テレビドラマ 日本名作ドラマ「美德のよろめき」(全二回)

テレビ東京 脚色／石松愛弘 演出／脇田時三

出演／藤谷美和子、阿部寛

⑤平成六年八月九日

テレビドラマ 文藝ト云フ事「美德のよろめき」

フジテレビ 演出／片岡K

出演／水島かおり、椎名桔平

(2) 大岡昇平「武蔵野夫人」は、スタンダールやフローベール「ボヴァリー夫人」に影響を受けて書かれたもの。昭和三〇年九月の『群像』誌上の「戦後の傑作ベスト・テン」というランキングで九位となり、人気がかがえる。

(3) 井上靖の『水壁』は、昭和三三年度のベストセラー第二位である。

(4) 管聡子「(よろめき)と女性読者―丹羽文雄・舟橋聖一・井上靖の中間小説をめぐって―」(『文学』平成二〇・三／四)では、丹羽文雄『日日の背信』(『毎日新聞』昭和三一・五・一四～三三・三・二二)、井上靖『憂愁平野』(『週刊朝日』昭和三六・一〇・六～一一・三〇)を対象として、昭和三十年代の姦通もの小説とその主な享受者であった女性読者の関係について論じている。管は「ちかごろベスト・セラーになる小説は、いずれも女性の心を掴んだ作品ばかりである。ベスト・セラーは女性によってつくられる」という十返肇の言葉をひき、中間小説、なかでも姦通もの

を描いた小説における女性読者の関心の高さを論じている。

(5) 三島と宇野千代との対談「女はよろめかず」(『中央公論』昭和三二・九)のなかで、「美徳のよろめき」の読者として想定している層を次のように語っている。

宇野 「美徳のよろめき」を読むような人は、あやかりたいと思っ  
て読むのかしら？」

三島 登場人物のどっちに、それは。女はそのヒロインにあやかり  
たいのかな。

宇野 女の読者が多いのですか、あなたは。

三島 小説の読者はほとんど女でしょう。どうも宇野さんは先入観  
で僕を見ている。僕は宇野さんをナイーブに見ているんだがな。

(6) 「三島由紀夫渡米みやげ話―「朝の訪問」から」(『NHK新聞』  
昭和三三・一・二六)

(7) 井上隆史「日本の作家49 豊饒なる仮面 三島由紀夫」(平成  
二一・五、新典社)

(8) 姦通罪は戦後の刑法改正により廃止となった。昭和二二年一  
〇月二六日公布、同年一月一五日施行。

(9) 昭和三〇年代にメディアをにぎわせた性の解放や夫婦の不貞  
問題についての記事の主なものについて以下にあげる。

・『週刊東京』(昭和三一・五・二九)「あなたの妻は浮気する その実  
態と精神衛生」

・『週刊読売』(昭和三一・一・二五)「48歳の抵抗 おじさま族も太

陽化する、99%が浮気する年齢」

・『朝日新聞』(昭和三二・四・一一)家庭欄「夫の浮気 妻の浮気  
公開討論会」(於/大阪朝日会館)大宅壮一(ジャーナリスト)、

宮城音弥(社会心理学者) この討論会では、両者ともに妻の浮  
気についてはいたずらに騒ぎ立てないという態度を表明してい  
る。

・『文藝春秋』(昭和三二・四)河盛好蔵「主婦五つの愉しみ 同窓会、  
仲人、へそくり、姦通映画、台所のオートメーション」

・『婦人朝日』(昭和三二・五)特集記事「不倫 現代のゆがめられた  
愛情」

・『婦人公論』(昭和三二・一一)座談会「(よろめき)時代」大宅壮  
一ほか

・『婦人公論』(昭和三六・三)三浦朱門「レジャー夫人浮気のいまし  
め」

・『日本』(昭和三七・八)梶尾季之「人妻1万1千人のよろめき白書」  
・『週刊現代』(昭和三七・一一・二五)「人妻は(よろめき)をこう告  
白する 50000人の人妻調査」

・『日本』(昭和三八・一)「若妻が最もよろめきたくなる時」

・『週刊現代』(昭和三八・七)「夫への秘密・妻への秘密 男女  
8000人の(よろめきと浮気)」

不貞について「浮気」という言葉で表象されていたものが、「美  
徳のよろめき」の昭和三三年以降は「よろめき」という言葉に変

わっている。(よろめき)ブームは昭和三〇年代後半までしばらく続き、さかんに読者の告白記事が掲載されるようになっていく。

- (10) 小笠原賢二「幸福」という存在論―『美徳のよろめき』を中心に―(『三島由紀夫論集1 三島由紀夫の時代』勉誠出版、平成一三・三)

(11) 『週刊東京』(昭和三一・五・一九)では巻頭特集として「あなたの妻は浮気する その実態と精神衛生」という記事を掲げ、東京家庭裁判所科学調査室の担当者(山本晴雄)が妻の浮気について警笛をならしている。「妻は、妻としての、また母としての自己を決して忘れはしないが、なおかつ、女として新しい自己の周囲をみまわそうとする」と妻が女という役割の復権を望んでいることを指摘し、「結婚生活の真只中に、こうしてたゆとう妻の姿がそれだというのならば、浮気はいかなる夫婦の間にも大なり小なり内在している」と語り、妻の浮気問題が日常的な関心事になっていることがわかる。

- (12) 荻野美穂『家族計画』への道 近代日本の生殖をめぐる政治(岩波書店、平成二〇・一〇)を参照した。

- (13) 佐藤秀明『日本の作家100人 三島由紀夫―人と文学』(勉誠出版、平成一八・二)

- (14) 十返肇『現代文学における意図の問題』(『群像』昭和三二・二〇)
- (15) 梶尾文武『三島由紀夫』美徳のよろめき』論―小説家の明晰―

(『国語と国文学』平成一八・七)

- (16) 斎藤美奈子『妊娠小説』(筑摩書房、平成六・六)

- (17) 関礼子「フェミニティとその回収―『仮面の告白』『潮騒』『美徳のよろめき』」(『国文学 解釈と教材の研究』平成五・五)

※三島由紀夫のテキストの引用は『決定版三島由紀夫全集』(新潮社)による。

**A Study of Yukio MISHIMA “Bitoku No Yoromeki”  
— An Examination of the Boom “Yoromeki(Flirting)” —**

Saori NAKAMOTO

Yukio Mishima’s novel “Bitoku No Yoromeki”, was a best seller that won many readers. Adapted into a radio drama and a film, this novel has caused a boom “Yoromeki”. This novel is widely consumed by the mass.

I examine the situation in which media of the time dealt with the “Bitoku No Yoromeki”, and the enthusiasm for Mishima. In relation with the problems of pregnancy termination and extramarital affair. By analyzing these phenomena, I clarify how the novel influenced the social situation.